

茨通研 認定試験直前学習会（二次試験対策）結果報告

2001.03.04(日)13:30～15:35 やすらぎ

1. 受付 支部の事務局の方2名?がやってくれました。

- 受付で名前と市町村名を書いてもらう。
- 番号をつけて、6名ずつにグルーピング（1, 2, 3, 4, 5, 6）= 36名
- グループに分かれて着席（2名×3列）
- 別れたら3つの机を合わせて着席

参加者は3名×6グループ=18名でした。
ちょうどいい人数でした。

2. 自己紹介（5分/13:35～13:40）

- 講師自己紹介（木下・馬場）
- グループ内で受講生同士、自己紹介。お互いの名前を覚える。

3. （導入）自己診断テスト（15分/13:40～13:55）

自己診断テストの意義を説明

短時間で自分の考えをまとめる。質問されたことについて即座に判断して答える。相手（採点者）に分かるように答える（回答を書く）。

設問1「あなたが茨城県登録手話通訳者認定試験を受けるのは、なぜですか？」

自分の手話技術のレベルを確認するため

手話通訳をやってみたいから（資格がないと手話通訳できないから）

地域に手話通訳者が不足しているので必要だから

その他（具体的に書いてください）

ポイント

登録手話通訳者になることって、どういうことだろうか？

資格を持って手話通訳をするって、どういうことだろうか？

設問2「今回の試験に向けてどんな勉強をしてきましたか？」

聞き取り手話表現通訳（）

読み取り筆記通訳（）

読み取り口頭通訳（）

手話通訳者としての基礎知識、倫理など（）

ポイント

登録手話通訳者に求められていることって、どういうことだろうか？

手話通訳って、どんな勉強・努力が必要でしょうか？

設問3「茨城県登録手話通訳者にとって一番大切なことは何だと思いますか？」

（ ）

ポイント

お互いに意見交換をする中で、茨城県下のろう者に関わる私たちが、どんなことを大切にしていっていいのかが、考える。

その中でも、手話通訳に関わることの意味を、受験の前に考え、自分自身を振り返ってみる。また、周りの聞こえない人のことに思いをめぐらせてみる。

4. 読み取り模試（ビデオ2題）書き取り（45分/14:00～14:45）

グループで相談することの意味を説明

通訳現場では、いろいろな人とペアを組むことになる。どんな人とも短時間でうち解り、フランクに相談し、助け合って通訳できる体制を築くことはとても大切。

通訳現場では、意見が異なった場合でも最終的に一つの日本語として表現しなければならない。独りよがりでもいけないし、互いに遠慮するばかりでもいけない。3人のグループの中で短時間に「一つの日本語」に整理し切るという「まとめる力」「決断力」が求められる。それを訓練してください。

通訳現場では、読み取りサポートなどお互いに協力し合うが、自分の担当の時には必要な集中力を高めなければならない。グループで取り組みながらも一人一人の集中力を落とさず、むしろお互いに高め合えるような雰囲気作りが求められる。

ビデオ2分＋書き取り3分＝5分×2題＝10分

他己採点（ペアを組んだ相手の答案をチェックし合って、二人で相談）3分

もう一度、ビデオを見て、自分の答案を修正する。10分

グループ採点（一人ずつ回答を読み上げて、グループとしての答案を作る）5分

発表5分

もう一度、ビデオを見て、確認。5分

模範解答配布、解説5分

読み取り筆記通訳試験のポイント

字がきれいで、読みやすい答案か。

表現されてないことが、書かれてないか。（創作してはダメ）

訳しもれはないか。

日本語として、おかしい文章はないか。

メモのコツ

メモすることよりも読み取って内容を理解することに集中する。

無理に日本語にしようとせず、手話として覚えたり、記号や絵を描いてイメージ化する。

話しの構造（組み立て）を分析（考え）、情報を整理しながら（分かち書きして）まとめる。

ただし、正確に反復が必要な情報（人名、地名、固有名詞、数字）は忘れる前に書いておく。

時間がなくて1題しかできなかった。

最後に気づいたポイントを解説

<木下>

通訳者としての「態度」に気を配ろう。通訳者は「ろう者の声」だ。通訳者の態度、ゆんでろう者が偏見にさらされたり、差別を受ける。落ち着いた振る舞いが大切。読み取れなかった時にうろたえては、聞いている聴者にろう者への不信感を招いてしまう。

読み取り通訳を受ける聴者にとっては、通訳者の声がそのまま「ろう者の声」だ。通訳内容と通訳場面に合わせた「声色」を使い分けよう。挨拶や解説の声なのか、友だち通しのおしゃべりの声なのか、会議での発言の声なのか、状況に合わせた「声色」を考えよう。

「声色」と同様、TPOに合わせた「ことばづかい」と聞いている聴者を意識した「日本語としての分かりやすさ」が、常に求められる。読み取り通訳は、通訳者の「常識」「教養」がもろ出てしまう。手話の技術以前に社会人としての「日本語の語彙の豊富さ」「社会教養の広さ」を身につけていかなければならない。

<メモのコツ解説>

いきなり書き始めるのではなく、短時間でも頭の中で文章の「構成」を考える。

試験なんだから「きれいな文字」で「常識的な用語」で「簡潔に」書くべし。突拍子もない日本語が出てくるわけない。

それぞれ自分なりの「緊張を防ぐ工夫」をしよう。木下の場合は「一番信頼しているろう者を思い浮かべる」。

5．聞き取り表現手話通訳模試（2題）（6分×3名×2題＝36分／14：50～15：30）

各グループから1名ずつ前に出て、計6名が同時に聞き取り表現。2分

同じグループの人が、チェック。一言ずつアドバイス（30秒×5人＝3分）

講師からポイント解説1分

2人目の人が、表現、同様にグループ・チェック＆講師ポイント解説。

3人目。

4～6人目は、2題目の問題をやる。

読み取り同様 時間がなくて1題しかできなかった。

最後に気づいたポイントを解説

<木下>

「視線」は、どこに向けるべきなのか？試験官から試験官に向かって「落ち着いた表情」を向けるべし。

手の「ホームポジション」をどこにするか？特別な決まりはないが、腰のあたりで手を組むのが一般的か？「間の取り方」に気を配る。むやみに間が空いては不自然だし、読む側が疲れてしまう。

試験なので、「服装」にも気を配るべし。

6．実技試験に臨む姿勢についてポイント解説（15：30～15：35）

試験官の目で自分の姿勢をチェック（1 態度・2 表情・3 視線・4 声・5 礼儀）

あがらない工夫をする。自分の信頼するろう者をイメージする。

登録試験は、あくまでも通過点に過ぎない。また、手話通訳ということも、ろう者の社会参加・自立を側面から支援する手だての一つに過ぎないことを肝に銘じる。

茨城の手話通訳者としての気概を持って試験に臨んで欲しい。まだまだ登録手話通訳者は不足している。是非、一生懸命努力して合格を果たして欲しい。一人でも多くの登録手話通訳者が誕生することを祈ってます。

所感

いつものことながらレベル的にはかなりばらつきがあったけれど、楽しく学習できた。最後に馬場さんに模範通訳もやっていただいて、大変良かった。やはり「上手な手話通訳を見る」ことが、一番の勉強になるのではないだろうかと感じた。

山崎さんからの指摘もあったように今日のような勉強会をどう「ろう者と共に作っていくか」が今後の課題だ。

以 上

（担当；木下耕一）